禅の友

ZEN no Tomo

10

2023

ご本山だより
大本山永平寺【秋の上山】

テレビや雑誌などで永平寺の特集が組まれる時、必ずと言っていいほど取り上げられるのが修行僧の上山風景です。雪が積もる中、網代傘をかぶり、旅支度の僧侶が、山門の前に整列している姿を目にしたことがある方も多いでしょう。これは春の上山の風景です。

永平寺では春以外にも十月に秋の上山者を受け入れています。

なぜ上山が許されるのが春と秋なのでしょう。

これはお釈迦さまの時代からの長い伝統です。インドでは初夏から秋にかけて雨季という季節があります。雨季は雨が多く外出が不便です。

また、生きものが活発に活動する季節のため、無意識に踏み潰してしまうなど無駄な殺生する恐れがあります。

そのため、当時の僧侶たちは、雨季の三ヵ月間は近くにいる者が一ヵ所に留まり修行をする生活をしていました。これを夏安居、または雨安居といいます。雨季が終わると各自が移動を始め、様々な地域を自由に往来し、他の僧侶や一般の人々と交流をしていたのです。

仏教が中国に伝わると、気候の問題もあり、冬にも安居をするようになりました。

こうして、夏と冬に一ヵ所に留まり、春と秋に往来するという決まりができたのです。

永平寺では春に上山をする者が多く、今年も五十名近くが上山しました。それに比べて秋上山は少なく、昨年は一名でした。

たった一人で山門に立ち、さぞ不安と緊張でいっぱいであったことでしょう。しかし、その姿は何よりも尊いものなのではないでしょうか。

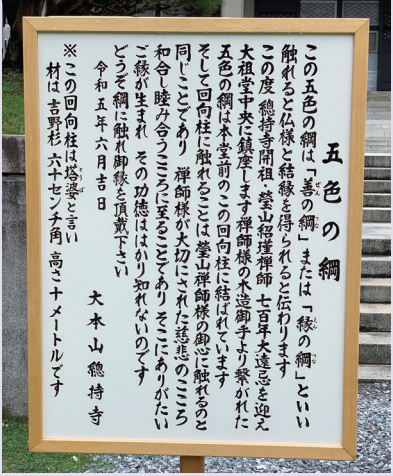
『華厳経』には初発心時便成正覚という言葉があります。仏道を歩もうと決めた時の、その姿と心こそ仏さまなのであるという意味です。上山者の姿を見るたびに、この言葉を思い出し、自分自身の日頃の行いを反省し、修行をする気持ちを改めるのです。

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより

大本山總持寺【大遠忌予修法要】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二一



大塔婆と善の綱

「秋晴れの境内の音は微塵かな」　野村喜舟撰

百間廊下を歩いていると爽風が通り過ぎ、静寂に包まれた自然を感じることができます。

十月は三十一日あるところから大月という異名があります。またそれより少ない日数月を小月といいます。

さて總持寺では十月九日より十八日までの十日間の日程で開祖瑩山紹瑾禅師七百回大遠忌予修法要が始まります。これは来年四月よりの本法要を受けての大切な法要なのです。

この期間中は全国から選任された五十三名の焼香師さまが本山に檀信徒の方々と上山され、禅師さまに代わって、それぞれの法要を厳粛に勤められます。十日間の期間ですので全国から手助けをしていただけなければ到底円成できるものではありません。一人一人の和合の力が今回の予修法要、そして来年四月一日より三週間に亘って修行される本法要へと継承されていくのです。

この和合の力を瑩山禅師は「一味同心・和合同心」と示されたのです。

また總持寺では十月より冬安居制中に入り、首座和尚（修行僧のリーダー）を中心に年明けの正月半ばまでの一〇〇日間の修行期間が始まります。

※大祖堂階段前の「大塔婆」と「善の綱」について

五色の綱は「善の綱」「縁の綱」といい、触れると仏縁が得られると伝わります。

この綱は大祖堂中央の瑩山禅師さまの御手より繋がれています。この綱に触れ、ご縁を頂戴ください。

曹洞 俳壇

選・坊城俊樹

タラップのサングラスより戦後かな

山口県　御江　恭子

評　これはもちろん終戦後に日本に来たマッカーサー司令官のことだろう。黒いサングラスをかけてタラップを下りる姿は誰でも知っている。しかしそれを俳句にしたのには初めて出会った。その日は八月三十日だったらしいが実感としてはそこから戦後となる。

ひろまえに水鉄砲の大いくさ

静岡県　石濵　徹

評　「ひろまえ」とは神社の境内くらいでいいだろう。子どもたちが入り乱れての水鉄砲の戦いが始まった。この風景は昭和・平成・令和の世になっても色褪せることがない。それほど男の子にとっての水鉄砲は楽しいもの。こんな戦争なら大歓迎である。

◆的の中矢羽根を揺らす青嵐　茨城県　山口　恭弘

◆千恵蔵の映画懐かし七変化　三重県　西村　廣視

◆万緑や鉄砲狭間より覗き見る　宮城県　髙橋　靜子

◆原爆忌スミソニアンのエノラゲイ　神奈川県　堀田　耕一

◆夏やさい即ぬか床にダイビング　神奈川県　佐藤　みえ子

◆疎水口へ押し寄す琵琶湖梅雨滂沱　山口県　粟屋　邦夫

◆夏草を刈ればおはせし石地蔵　鳥取県　徳本　義則

◆袖口もひとつ折り上げ街薄暑　宮城県　阿部　徳夫

◆万緑の上も万緑の稲荷堂　青森県　中田　瑞穂

◆隆々と仁王の裸身油照り　兵庫県　内藤　昭子

選者吟

君に触れたくて尖りし薔薇の棘

俊樹

作句小見　これは恋の予感の句。薔薇そのものの写生なのだが、その鋭い棘を見ているとその人を刺したくて尖っているように見えて来た。ただしそれは相手の指をちょっと傷つけたいと思うような薔薇のいじらしさかも。果たしてこの薔薇は男か女か。

【送付先】〒105-8544　東京都港区芝2-5-2　曹洞宗宗務庁　禅の友係

曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

ため息を吐けば心の底に棲むワタシがじつと耳をかたむく

福岡県　三吉　誠

評　作者の中にはもう一人の私がいるらしい。そのもう一人が、ため息をついた私を気遣っていると詠う。冷静な作者像が立ち上がるが、一方で孤独な作者だ。都会で暮らす多くの人々に通じるような感覚だ。

食卓にてんとう虫のお客様今日は朝から一人じゃなくて

愛知県　鈴木 洋子

評　童話のようなタッチで詠われていてとても新鮮な一首。だが、作者にはお連れ合いを亡くされたばかりかと思われる別な一首があった。「今日は」の「は」に注目したい。

◆フーテンの寅さん初夏の土手をゆく葛飾柴又そよ風の吹く
東京都　長谷川 瞳

◆雨ふれば雨の匂ひの田んぼ道昭和の子らの影が駆けゆく
鳥取県　眞山 博充

◆マジシャンの取り出す鳩の精神は傷つきやすき少女の心
岐阜県　後藤　進

◆わが庭木しばし剪定延期とすコゲラの巣立ち見極めるまで
静岡県　杉原 民子

◆傘がない彼の形見が消えました「忘れていいよ」のメッセージかな
宮城県　阿部 澄江

◆夢のなか君が何かを告げたのに思い出せない今朝は悲しい
秋田県　小松 紀子

◆その地にて食ぶるが良しと駅弁を横目に巡る物産展の
北海道　加藤 智子

◆我がことに感(かま)けゐる間に庭のもの水が恋しと項垂(うなだ)るるなり
鳥取県　横山 稾吾

◆鍬を止め蚊帳吊草を裂きて言ふ「林檎の匂ひ」と若き日の母
静岡県　小川 健治

◆カーテンをあけて見やれば朝霧の日々見なれたる遠野かくせり
島根県　宮廻 恒雄

選者詠

足元にぽっかり開く空間が　亡き犬今も寝そべりていて

ちづ

作歌小見　杉原さんの結句「見極める」には「見届ける」の意味合いも込められていてコゲラへの愛の深さを感じさせます。横山さんから「感(かま)ける」の読みを覚えました。夢の中で亡き人と会話する小松さんの一首も味わい深いものがあります。

ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。